

機関番号：34314

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21700722

研究課題名（和文） 戦間期の家事科学にみる社会教育と産学協同

研究課題名（英文） Social Education and Academia-Industry Cooperation on domestic science in the Interwar Period

研究代表者

村瀬 敬子（MURASE KEIKO）

佛敎大学・社会学部・講師

研究者番号：20312134

研究成果の概要（和文）：

1920年代から30年代における女性向け社会教育において、家事科学がどのように表象され、そこに女子教育者がどのようにかかわったのかを研究した。当時の社会教育のためのメディアとして婦人雑誌、ラジオ放送、博覧会をとりあげ、雑誌『主婦之友』における台所空間に関する言説や表象、ラジオの家庭・婦人向き番組における料理放送に関する言説や表象、電気の博覧会における科学技術と家庭電化に関する言説や表象について、それぞれ分析を進めた。

研究成果の概要（英文）：

This study has examined how the domestic science was represented and how female educators were engaged in the social education for women in the 1920s and 1930s. This study has focused on women's magazines and radio broadcasts and expositions that served as the media for social education in those days, and has analyzed representations and discourses of kitchen spaces in "Syufu-no-tomo", of cooking programs on the radio, and of technology and domestic electrification on expositions on electricity respectively.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：家事の科学化、社会教育、女性、家政学

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、第二次世界大戦以前の女子教育の形成過程を問う研究が多く出されていた。それらの多くは、女子教育そのものや女学生を対象として、思想や制度、文化、個別の教育活動を解明することに主眼が置かれており、女子教育者や女子教育機関がどのような社会教育を行い、その際、産業（団体）とどのようにかかったのかについての研究はあまりなされていなかった。

それまで申請者は、村瀬敬子『冷たいおいしさの誕生——日本冷蔵庫 100 年』（論創社、2005 年）、村瀬敬子「<家庭電化>のディスプレイ—大正から昭和初期における電気の博覧会を中心に」（『博覧の世紀』梓出版、2009 年）等を通して、テクノロジーとライフスタイルのかかわりを歴史社会的に研究してきた。そこでミシンや冷蔵庫をはじめ計量器具や電気器具などの近代的な生活財は、透明なテクノロジーというよりも、教育や婦人雑誌や博覧会、ラジオ放送などのメディアで提示された価値やライフスタイルと不可分のものであることが明らかになってきた。またこうした研究を通して、家政学者が、家庭電気普及会や日本冷凍協会などの各種の産業関連の団体に会員として参加し、女子教育者の立場からさまざまな提案を行っていることがわかってきた。

2. 研究の目的

本研究では、戦間期に女性を対象とした社会教育が隆盛し、そこで生活や家事の科学化が推進されたことに着目し、①博覧会・展覧会や婦人雑誌、ラジオ放送等を通じた社会教育活動において、家事の科学化がどのように推進され、表象されたのかを分析し、②そこに家政学者がどのようにかかわったのかを明らかにし、③またその際、家政学者や女子教育機関が、産業団体等とどのような関係を取り結んできたのかを明らかにすることを研究課題とした。

3. 研究の方法

(1) 先行研究及び一次資料の収集

家事科学に関する社会教育および産業団体

の資料は数多く存在するため、以下の内容に絞って先行研究および一次資料の収集を進めた。

①戦間期の女性向け社会教育に関する先行研究の収集、および文部省や内務省が家事科学の社会教育を目的として開催した展覧会に関する一次資料の収集

②戦前・戦時期のラジオにおける婦人・家庭向け放送に関する一次資料の収集

③戦前・戦時期の婦人雑誌（『主婦之友』『婦人公論』『婦人画報』）における家事科学に関する記事の収集

④電気にかかわる博覧会・展覧会に関する資料の収集。および家庭電気普及会（電気普及会）の機関誌や出版物等の一次資料の収集

(2) 資料の分析

①収集した資料を、メディア別（政府主催の展覧会・講演会、ラジオ放送、婦人雑誌、電気の博覧会）に整理して、言説の分析を行った。

②さらに、収集した資料を、家事科学の領域別（調理・料理、台所空間のあり方、家庭電化等）に分類して言説の分析を行った。

4. 研究成果

研究成果として、家事科学の多様な領域のうち、「食」に関する領域および「電化」に関する領域について、現時点で成果を公表している。以下では、既に論文にまとめたものを中心にその内容を概説するとともに、今後の展望について述べる。

(1) 食領域にかかわる家事科学（家政学的な知）の社会的な浸透に注目し、家庭の台所空間に付与された意味の変容と、家事への科学的なまなざし、台所の生活財等の商品化が、どのようにかかわりながら婦人雑誌で表象されていったのかを論文（村瀬敬子『『主婦之友』にみる台所と女性—生活空間の意味変容』高井昌史・谷本奈穂編『メディア文化を社会学する—歴史・ジェンダー・ナショナルリティ』）にまとめた。

1920 年代から 30 年代の婦人雑誌『主婦之友』において、「台所という空間」と「主婦」がどのように交差しながら、台所に新たな意

味が付与されていったのかを婦人雑誌のメディア形式や読者層にも配慮しながら明らかにした。

『主婦之友』の台所記事では、台所は「改良すべきもの」として捉えられており、「衛生」「能率」といった家政学的な視線から改良が提案されている。また誌上の台所設計案懸賞の審査には女子教育者の大江スミ子がに当たっており、家政学という専門的な立場から解説を行っている。

さらに本稿では、女子教育ともつながる「教養としての料理」が誌上でどのように展開していったのかについて、グラビアページなどヴィジュアル・イメージの変遷から論じた。

(2)放送の社会教育的な側面に注目して、女性の社会教育を目的として放送された家庭・婦人向け番組のうち、食分野にかかわる放送内容を分析し、論文(村瀬敬子「ラジオの料理番組と主婦イメージ」『vesta』76号)にまとめた。

特に1925年に放送が開始されたラジオの料理番組「料理献立」と家庭における実用的な知識全般を取り上げた「家庭講座」、日用品の小売価格を放送した「日用品値段」を中心に分析を行った。

日本放送協会の機関誌に加え、『ラジオの日本』等のラジオ雑誌、放送内容等をまとめた書籍等を資料として、初期の料理番組がどのようなものであったのかを明らかにするとともに、放送局側が聴取者として期待した女性像等についても分析した。

(3)戦前期のラジオの料理番組「料理献立」が、東京からの全国中継と地方局のローカル放送が組み合わされて放送されていたことに着目し、地方局において独自に編成された「料理献立」と女子教育とのかかわりを分析し、論文(村瀬敬子「ラジオの料理番組とローカル放送」『vesta』77号)にまとめた。

放送内容をまとめた書籍や残存する放送台本、地方での「ラジオ料理講習会」等から、番組への素材提供者を分析し、札幌、仙台、名古屋、広島、熊本などのローカル局では主に管内の女学校が番組へレシピを提供していることを指摘した。

地方の女学校教員に期待されたのは、中央・都市部の料理に関する知を「地方向き」にアレンジすることであったと考えられる。

こうしたことから、ラジオの料理番組を通じた社会教育における女子教育者の役割について考察した。

(4) (2)、(3)の「ラジオの料理番組と主婦イメージ」、「ラジオの料理番組とローカル放送」の各論文の内容をさらに発展させ、論文(村瀬敬子「ラジオの料理放送にみる「主婦」の統合と分断—1930年代を中心として」『社会学部論集』51号)としてまとめた。

本稿では1930年代を中心にする中で、料理放送が視聴者としての女性、なかでも「主婦」とどのような関係を取り結んでいたのかを分析した。その結果、「料理献立」が近代的な主婦へと女性を「統合」するだけでなく、階層や地域などの差を顕在化させる、いわば「分断」の契機ともなっていたことを指摘し、その社会的な背景を考察した。

本論文では1940年代のラジオの料理放送にも言及し、戦間期と戦時期の家事科学との連続性／非連続性についても考察した。

(5)1910年代から1920年代に開催された電気博覧会における展示を分析し、そこで科学技術がどのように表象されたのか、それは日常生活のあり方とどのように交差したのか等については、論文(村瀬敬子「電気博覧会における科学技術の表象と生活の科学化」『生活デザイン研究』5号)にまとめた。

博覧会において電気は現在／過去、都市／寒村、文明／野蛮といった構図のなかで「文明化」のエージェントとして表象されるとともに、「万能」なエネルギーと位置づけられていた。政府の「家事科学展覧会」等と電気博覧会における家庭電化の展示を比較すると、どちらかといえば前者が現実の延長線上に生活の科学化や合理化を構想しているのに対し、後者は電気という科学技術の「生活化」＝「文明化」がめざされ、そこに「電気万能」といっ言説が織り込まれていることがわかる。こうした電化した生活イメージは、家庭電気普及会の活動や女学校教育にもかかわっていることを指摘した。

(6)現在までに論文として発表することができたのは、(1)～(5)の内容であるが、戦間期に文部省や内務省が行った家事科学の社会教育に関する分析、および家庭電気普及会等の産業団体における女子教育者の役割の分析等

の結果については、研究成果として発表できていないため、今後、報告していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 村瀬敬子 「ラジオの料理番組とローカル放送」『vesta』77号、2010年、pp. 72-77、査読なし
- ② 村瀬敬子 「ラジオの料理放送にみる「主婦」の統合と分断—1930年代を中心として」『社会学部論集』51号、2010年、pp55-67、査読なし
- ③ 村瀬敬子 「電気博覧会における科学技術の表象と生活の科学化」『生活デザイン研究』5号、2010年、pp. 45-58、査読なし
- ④ 村瀬敬子 「ラジオの料理番組と主婦イメージ」『vesta』76号、2009年、pp. 44-49、査読なし

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

- ① 村瀬敬子 「『主婦之友』にみる台所と女性—生活空間の意味変容」高井昌吏・谷本奈穂編『メディア文化を社会学する—歴史・ジェンダー・ナショナリティ』世界思想社、2009年、pp. 80-107

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村瀬 敬子 (MURASE KEIKO)

研究者番号：20312134

佛教大学・社会学部・講師